

日本における喪失・悲哀に関する研究の推移と文献目録

— 「心理臨床」の視座からの歴史的概観 —

山本 力

要旨 本研究は、心理臨床の視座から日本における「喪失と悲哀」に関する文献を収集し、文献目録を作成すると同時に、研究の時代的推移と動向をレビューすることを目的とするものである。その結果、1964年から1994年に至る30年間に発表された論文・著書・翻訳書の総数は228編であった。文献数は1979年頃から漸増し、1980年代中頃には急激な関心の高まりを示し、1990年前後にひとつの頂点を示している。喪失研究の潮流としては、二つの大きな流れが確認できる。一方は、心理学や精神医学の視座からの「喪失と悲哀の過程」に関連する研究であり、他方は医学・看護学・宗教学などにおける「死生学やターミナルケア」に関する研究である。これらの研究の時代的推移を大局的に展望すると、優れた文献の出版や特別な社会的事象の生起などをランドマークとして、5つの時期に区分できることが明らかになった。

キーワード：対象喪失、悲哀、死生学、ターミナルケア、心理臨床

1. はじめに

わが国において「喪失と悲哀」(loss & mourning)の問題に関する関心が高まり、学問的研究も本格的に始まったのが、1985年(昭和60年)前後であったと思われる。18～19年前に筆者が死別に関する研究を開始した頃は、参考文献もほとんどなく、いわゆる精神分析の領域、それも欧米の文献しかみつづけることができなかった。それが、今日では大きな学際的な研究領域を形成しつつあるといってもよい状況となった。この歴史的経過の中で、わが国の喪失と悲哀の研究の流れを大別すると二つに区分できる。つまり、一つ目が、心理学や精神医学の立場からの「喪失と悲哀の過程」(loss & mourning process)の研究であり、二つ目が、医学や看護学・宗教学などの立場からの「死生学やターミナルケア」(thanatology & terminal care)に関する研究である。

昨年度の保健福祉学部紀要において、山本(1994)は「欧米での喪失・分離と悲嘆」に関する主要研究の展望を行ったが、本研究はその続編をなすもので

ある。ただし、今回は日本の研究の文献目録の作成を主な目的とする。要するに、筆者が長年にわたって収集してきた日本における喪失と悲哀の文献を年代別に配列し、その上で歴史的趨勢についても簡単な考察を加えることを狙いとするものである。

2. 研究と実践の歴史と動向

(1) 文献数の時代的推移

ここに挙げた邦文の文献は、心理臨床に関連する領域を中心に、死生学・医学・看護学・社会学などから論文・著書・翻訳書(学会発表は除いている)などを経年的に収集・蓄積してきたものである。したがって収集から漏れた関連文献も多々あるであろうが、心理学的な視点からの主要文献は網羅されていると思われる。また闘病記や日記など学術研究ではないが、喪失・悲哀の認識を社会的に啓発する上で大きな影響があったと判断される文献も含めた。翻訳書も厳密には日本の研究には含まれないが、動向を知る上では不可欠であるので文献としてカウントした。その結果、1964年から1994年までの30年間で総数228編の論文・著書・翻訳書が見出された。

年代別の文献数一覧を図1に示した。この図1の文献数の棒グラフからも示唆されるように、1980年代の後半より研究の量と質が確実に増大し、1990年には文献数（23編）は頂点に達している。その後は心理臨床の文献に関する限りでは減少傾向を示している。しかし、今回の文献目録には含まれていないが、1995年の阪神大震災を契機として再び文献数が増加することが予想される。さらに、悲哀カウンセ

リングなどの援助論や喪失の心身に与える影響など未解決の課題は山積していることからみて、一貫した系統的な研究の継続が不可欠と思われる。次の節において研究の時代的推移を5つの時期に区分して展望する。なお、時代区分の設定においては、著名な研究書や翻訳書の出版、また大規模な事故や災害の発生などが、いわゆるランドマークとして採用できることが確認された。

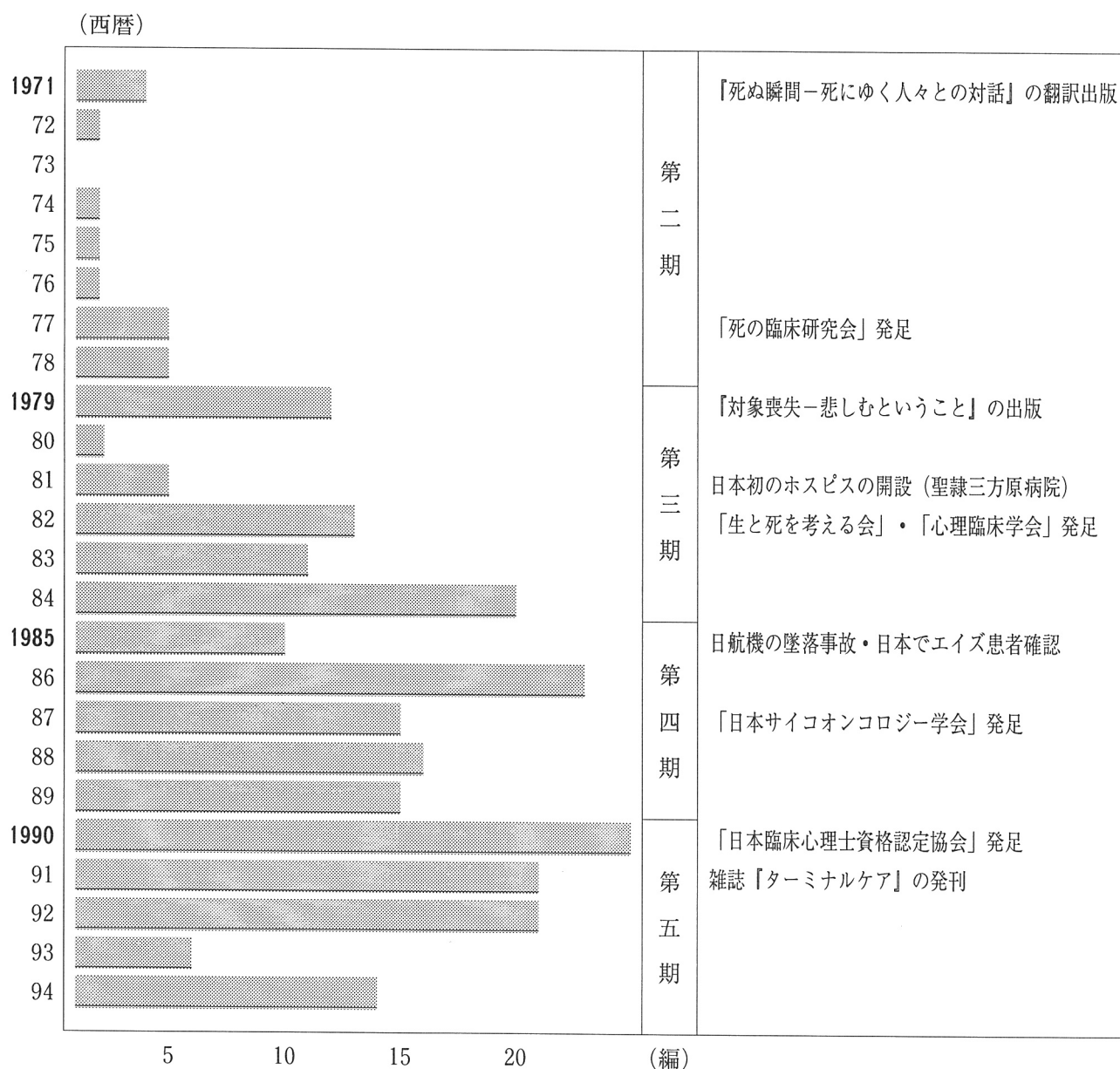


図1：文献発表数の時代的推移と関連事項（1971～1994）

(2) 時代的推移と研究の時代区分

〔第一期（プレ期）：1964～1970〕

1960年代は研究が始まる前の「プレ期」と考えられる。まだ太平洋戦争の傷跡が生々しい時期ではあ

ったが、遺族の悲哀が学問的な研究対象となることはなかった。この時期の開始を1964年としたのは、死と闘った生の記録が二冊の本となって出版されたからである。文学者の高見順（1964）による『詩集：

死の淵より』と、宗教学者である岸本英夫の『死を見つめる心—ガンと戦った十年』が発行されたからである。特に、後者の本は、死と直面しながら生きる姿をレポートしたものとして、多くの人に勇気を与えた。

学問的な色合いを持った最初の本は恐らく、神谷美恵子(1966)の『生きがいについて』であろう。長島愛生園での医師としての経験を織り込みながら、「生きがいの喪失」という視点から様々の喪失の問題を論考した名著である。なお、喪失論の周辺研究として、いわゆる「障害受容」の問題がこの頃から論議されはじめた。また、WHOの依頼によってまとめられた、Bowlby,J.(1951)の“Maternal Deprivation and Mental Health”が、1967年に『乳幼児の精神衛生』の書名で翻訳出版されている。このモノグラフは、いわゆる「愛着理論」の出発点になる研究である。

そして、60年代の末に悲哀の過程に関して、最初の心理学的な研究が発表された。Bowlby,J.(1980)の著書にも引用されている“Mourning in Japan”である。この研究は、ロス在住のYamamoto,J.が提案し、小此木啓吾・岩崎徹也らと共同で行われた。小此木(1991)によれば「夫が突然に急死した未亡人を探し出し、この未亡人の一年間にわたる喪の過程を精神医学的にフォローアップし、ロンドンでのマリスやパークスの研究との比較を行うこと」を目的として実施され、「国際的に見て、喪のプロセスの文化差を研究した最初の論文」でもあった。ただ、この論文は米国の雑誌に掲載されたので、わが国ではごく一部の研究者のみが知るだけであった。

【第二期(黎明・準備期): 1971~1978】

大学紛争が下火となった1971年(昭和46年)に、エポック・メイキングな著書が翻訳された。Kubler-Rossの『死ぬ瞬間—死にゆく人との対話』である。1969年に原著“On death and dying”が出版され、その2年後には翻訳が出ている。この本は「死にゆく過程と死別、悲嘆」の問題を世界中に訴えた報告書であり、彼女の啓発・実践活動の出発点となった。事実、多くのターミナルケアに取り組む医療従事者や宗教家などに大きな影響を与えることになった。『死ぬ瞬間』という邦訳名の新鮮な響きも世の注目に一役買ったと思われる。同じ年に、

余り目立たなかったが、Lifton,R.による広島の被爆者の調査(1962年に実施)に基づいた研究が続けて翻訳された。『死の中の生命—広島生存者』(1971)と『だれが生き残るか』(1971)である。この研究はユダヤ人のホロスコープの生存者の悲哀の研究に匹敵するものであり、戦争や大規模災害による喪失・外傷の研究の嚆矢となった。しかし、わが国の研究者による心理学的な視座からの研究はまだなかった。その中で山本力(1978)は、恋人を自殺によって失った女性の喪の仕事を援助する16セッションの心理療法を行い、『対象喪失と喪のプロセス』を主題とする事例報告を行った。当時、死別の面接過程を検討した事例研究は、わが国にはほとんどなく、参考文献として、Freud,S.や Klein,M.、Bowlby,J.らによる精神分析の幾つかの文献が利用できるのみであった。

医師によるターミナルケアに関する先駆的な文献も、この時期に発表されている。河野博臣(1974)の『死の臨床—死にゆく人々への援助』や柏木哲夫(1978)の『死にゆく人々のケア』である。やがて河野らは1977年に「死の臨床研究会」を設立し、大きな発展をとげていくことになる。

【第三期(翻訳・実践期): 1979~1985】

心理臨床の領域で大きな役割を果たしたのが、小此木啓吾(1979)の『対象喪失—悲しむということ』である。日本の精神分析学会の創始者である古沢平作を記念するシンポジウムでの報告を契機として対象喪失と悲哀の仕事についてまとめたものであるが、この先駆的な著書によって心理臨床の視座から喪失の問題を認識する枠組みを広く提供することになった。対象喪失や悲哀の仕事という専門用語が、いきなり一般向けの書籍で知られるようになり、逆輸入的に専門論文でも採用されるようになっていった。1980年代の前半は、この領域に対する関心の広がり背景にして、翻訳書の出版があいついだ。例えば、Bowlby,J.(1981)の“attachment & loss”を主題とする三部作が翻訳され、Mahler,M.(1981)、Masterson,J.F.(1982)らの、精神分析的発達論に基づいた喪失・分離論についても日本語で読めるようになった。さらに、Rutter,M.(1979, 1984)の『母性剥奪理論の功罪』も看過することができない。死別に関する啓発的な指針としては、Grollman,

E.A. (1982) の『おじいちゃんは死んだのです』があり、専門書としては自殺学で著名な Shneidman, E.S. (1983) の『死の声—遺書・刑死者の手記、末期癌患者との対話より』が出版された。さらに、Fulton, R. (1984) の編集になる『デス・エデュケーション』の翻訳がでた。あまり知られていない本であるが、死生学や悲嘆論にとって重要な論文が収録されている。以上のように翻訳出版が比較的多いのにくらべ、オリジナルな研究論文は少ないのが、この時期の特徴であろうか。

この時期の第二の特徴はターミナルケアに携わる医師や看護婦、宗教関係者の実践活動と運動が一齐に開花したことであろう。そして、ホスピスケアなどに象徴されるように、医療中心の“cure”から患者中心の“care”へと視点が移行しはじめた。河野博臣らによる「死の臨床研究会」は、すでに1977年には活動を開始しており、先駆的な活動が行われている。そして、カトリック教会に所属する宗教学者のアルフォンス・デーケンが主催する「生と死を考える会」が1982年に発足し、全国的な運動組織として広がっていった。生と死の問題を考える裾野を広げる上で、この会が果たしている役割は少なくないと思われる。さらに、ターミナルケアに関連して、1981年に日本で最初のホスピスが浜松の聖隷三方原病院内に開設され、1984年には柏木哲夫によって淀川キリスト教病院内にホスピス病棟が設立された。

【第四期（展開・拡大期）：1985～1989】

衝撃的な形で、喪失・悲哀の問題を再考させる事故が1985年8月12日に起こった。日航ジャンボ機が群馬県の御巣鷹山に墜落し520名の人達が亡くなった。航空機史上最大の犠牲者を出したことによって、社会的な注目は大きく、死別研究と遺族の悲哀の援助についても多くの示唆をもたらした。この未曾有の事故は、わが国におけるコナツ・クロブ事件とも言えるかもしれない。欧米の代表的な死別研究者である、Parks, C.M. の『死別からの回復』

(1987) の翻訳も時期を得ていた。この大事故が喪失の問題を研究する人達に与えた潜在的影響は相当なものであり、死別研究の展開を促進する一因となったと思われる。また、同じ年に日本で初めてのエイズ患者が確認されている。

この時期の特徴として、死の問題や喪失・悲嘆に

関する社会的関心の飛躍的な拡大があり、研究も本格的な展開を始めたことがあろう。デーケン, A. の主催する「生と死を考える会」(1982年以降) の地域組織の展開、その活動記録の出版や講演は社会的な啓発において大きな役割を果たしていった。さらに、千葉敦子(1986・1987) のリアルタイムの闘病記や若林一美(1987・1989) の著書なども相乗的な効果をあげ、デーケンの提唱する死の準備教育(death education) という言葉も徐々に市民権を得るようになった。この領域に関する看護関係の文献も充実してきた。一般向けの雑誌である『現代のエスプリ：248』でも、平山正実・斉藤友紀雄(1988) の編集により「悲しみの援助」がまとめられた。

この頃、河合千恵子(1984・1987・1988) が老年期における配偶者の死別に関して組織的な調査を実施し、184例の分析に基づいて一連の研究発表を行った。Yamamoto, J. たち(1969) の先駆的研究を除けば、最初の死別に関する調査研究として特筆されるべきであろう。また、心理臨床の領域では喪失の経験と病的悲嘆や精神病理との関連性の問題も取り上げられるようになった。つまり、喪失・離別の経験を引き金にして、抑うつ状態や強迫症状など神経症水準の問題が発症した事例や、同様の契機から精神病様症状を呈した事例などの検討がなされるようになった。今後、心理的な喪失経験がある種の神経症や心身症を引き起こす可能性やそのメカニズムなどについて詳しく検討することが重要課題の一つとなるであろう。

【第五期（結実・転換期）：1990～現在】

1990年代の初頭は、1980年代に展開してきた個々の研究が集積し、最初の結実を迎えた時期である。例えば、前述の河合千恵子(1990) は事例の紹介を中心とした『配偶者を失う時』と題する著書を出している。同じ頃、渡米中に妻を亡くした社会心理学者の石川弘義が、自らの喪の仕事として書いた『妻からの贈物』(1986) と、その学問的昇華である『死の社会心理』(1990) を発表した。平山正実(1991) も10年間に蓄積した論文を集めて『死生学とはなにか』を発表している。とりわけ経験の集大成として注目されるのは、日本死の臨床研究会(1990・1995) の編集になる『死の臨床』(全6巻) である。このシリーズは死の臨床研究会における膨大な発表が集

表1：喪失・悲哀の研究の時代的推移と時期の区分

第 一 期 (1964～1970)	プレ期 1 1 編	1964年の岸本英夫の『死を見つめる心』や高見順などの闘病記の発刊をもって、今日の「生と死」・「喪失と悲哀」に対する注目が始まったとみなせる。学問的文献としては、神谷美恵子(1966)の『生きがいについて』などが先駆的な考察といえよう。そして、日本人による最初の死別研究である『日本における悲哀』が、ジョー・ヤマモトや小此木啓吾(1969)らによって英文雑誌に報告された。また、ボールビィの『乳幼児の精神衛生』の翻訳が出版され、日本でも母性剥奪の研究が開始された。他方、障害受容に関する紹介と研究も始まった。
第 二 期 (1971～1978)	黎明期 1 5 編	大学紛争が終息を迎えた1971年に、キューブラ・ロスの画期的著作である『死ぬ瞬間』の邦訳が刊行された。リフトンによる『死の中の生命』や『だれが生き残るかー被爆者と喪失の主題ー』も翻訳された。さらに愛着理論から喪失と分離に肉薄したボールビィの『愛着と喪失』のシリーズも翻訳出版され、精神分析では、フロイト, S. やクライン, M. の対象喪失に関する理論の紹介がなされた。山本力(1978)は喪の過程に関する事例研究を心理臨床の立場から報告した。また河野博臣や柏木哲夫らの医師によってターミナルケアに関する研究が開始された。
第 三 期 (1979～1984)	実践期 5 6 編	80年代前半は実践期である。1979年に小此木による『対象喪失』の出版により、対象喪失の用語が広く知られ、研究も促進される。医療や死生学の領域に関連して「死の臨床研究会」(1877～)やデーケンの主催する「生と死を考える会」(1982～)が発足し、日本初のホスピスも聖隷三方原病院の中に誕生した。以上の如く看護や宗教学の領域での実践と運動が先駆者を核として展開しはじめた。他方で、欧米の先駆的な研究所の翻訳が増加し、欧米の経験の受容や理論的基礎が徐々に形成されつつあった。だが独自の研究は報告されることは少なかった。
第 四 期 (1985～1989)	発展期 7 1 編	1985年に発生した日航ジャンボ機の墜落は米国のココナッツ・クローブ火災にも対応するかもしれない。大量の事故死の結果、遺族の悲哀の問題に関心が集まった。そして、死の問題やターミナルケアについての論議が本格化し、様々の闘病記が出版された。この時期、「生と死」の問題に対する社会的関心が急速な広がりをみせた。しかし、なぜか死別研究は必ずしも発展しなかった。そのような状況の中で、河合千恵子が高齢者の配偶者の死別の問題に関する調査報告を行っている。また、心の病の発症に関連する喪失や悲哀の事例研究も報告されるようになった。
第 五 期 (1990～pr.)	結実期 8 0 編	1990年代に入り、これまでの個々の研究が集積され、統合されるようになった。最初の結実期を迎えたといえる。河合千恵子、石川弘義、平山正実らの総括的な著書が発行された。雑誌『ターミナルケア』が創刊され、『精神分析研究』では「対象喪失と心の成熟」が特集され、『家族心理学年報10』でも「家族の離別と再生」の特集が組まれた。この時期を象徴するのが、野田正彰の『喪の途上にて』(1992)である。つまり、社会・心理的視点から大規模な死別や災害の問題が論じられ、阪神大震災の支援へと橋渡しされていくことになるのである。

積されており貴重な資料となっている。

専門雑誌でも「喪失と悲哀」に関する領域の特集が試みられ、関心の広まりと深まりを示唆している。まず、『精神分析研究』で2回の特集が組まれている。特集「喪の仕事とエディプス葛藤」(Vol.34,2)と、特集「対象喪失と心の成熟」(Vol.34,5)である。後者における小此木啓吾(1991)の論文は精神分析の分野における最も包括的で優れたレビューである。また、1991年には雑誌『ターミナルケア』が創刊され、喪失・悲哀の問題も報告されるようになり、「死

別とグリーフ・ワーク」(1991)が特集されている。さらに、1992年には『家族心理学年報10』でも「家族の離別と再生」という特集が組まれ、喪失の問題を家族システムの枠組みから把握する試みを行っているが、システムとしての家族という視座からの再検討は重要であると思われる。

大規模に発生した喪失と心の傷の主題がクローズアップされたことも第五期の特徴である。1991年の雲仙普賢岳の火砕流、1993年奥尻島での大地震、そして、1995年の阪神・淡路大震災と多くの被災者を

出した自然災害は、喪失と悲哀の問題の取組みに新たな展開をもたらした。それは喪失の悲しみという、きわめて個別的な経験が社会的現象として顕在化したことである。自然災害と同様に航空機事故も似通った性質を備えている。その意味で野田正彰(1992)による、日航機事故の遺族の悲哀に関する報告書『喪の途上にて—大事故遺族の悲哀の研究』は象徴的な意義を持つ貴重な研究である。なお、現代社会が抱える問題に取り組んでいる作家の柳田邦男が編集した『同時代ノンフィクション選集：「生と死」の現在』も同じ年に発行されている。本研究の文献目録には掲載していないが、1995年1月17日の阪神・淡路大震災を契機に、災害による喪失・悲嘆と心的外傷(trauma)、その心のケアという概念が一種の流行になったが、日本における学問的な検討はこれからの課題である。

もう一つの動向が、喪失と悲哀の援助、つまり悲哀のカウンセリングや心理療法についての翻訳と紹介が始まったことである。例えば、Worden,J.W.(1993)の『グリーフ・カウンセリング』や、Macnab,F.(1994)の『喪失の悲しみを越えて—新しい旅立ちのサイコセラピー』などがある。今後、心理的な援助技法の論議と開発が、喪失論の大きな焦点となるであろう。

日本における喪失と悲哀に関する文献一覧 1964年～1994年

[第一期：1964～1970]

- 岸本英夫(1964)：死を見つめる心—ガンとたたかった十年間。講談社。
- 高見 順(1964)：詩集・死の淵より。講談社。
- Spitz,R.A.(1965)：母—子関係の成り立ち。古賀行義訳、同文書院。
- 神谷美恵子(1966)：生きがいについて。みすず書房。
- Bowlby,J.(1967)：乳幼児の精神衛生。黒田実郎訳、岩崎学術出版社。
- 江藤 淳(1967)：成熟と喪失—“母”の崩壊。河出書房新社。
- Binswanger,L.(1969)：フロイトへの道—精神分析から現代存在分析へ。竹内直治・竹内光子訳、岩崎学術出版社。
- Freud,S.(1969)：無情ということ。高橋義孝他訳、フロイト著作集・第3巻 文化・芸術論、人文書院、314

—317。

- Yamamoto,J.・小此木啓吾・岩崎徹也(1969)：Mourning in Japan. Am. of Psychiatry,125,1660-1665.
- Freud,S.(1970)：悲哀とメランコリー。井村恒郎・小此木啓吾他訳、フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論、人文書院、137—149。
- Freud,S.(1970)：制止・症状・不安。井村恒郎・小此木啓吾他訳、フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論、人文書院、320—376。

[第二期：1971～1978]

- Kübler-Ross,E.(1971)：死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話。川口正吉訳、読売新聞社。
- Lifton,R.J.(1971)：誰が生き残るか—プロテウスの人間。外林大作訳、誠信書房。
- Lifton,R.J.(1971)：死の中の生命—広島に生存者。梶井迪夫他訳、朝日新聞社。
- Binswanger,L.(1972)：うつ病と躁病。山本巖夫・宇野昌人・森山公夫訳、みすず書房。
- Cain,L.(1974)：未亡人。曾野綾子・鶴羽信子訳、文藝春秋。
- Kavanaugh,R.E.(1975)：死と出会うとき。岡堂哲雄・栗山仁子訳、金沢文庫。
- Bowlby,J.(1976)：母子関係の理論Ⅰ 愛着行動。黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一訳、岩崎学術出版社。
- Bowlby,J.(1977)：母子関係の理論Ⅱ 分離不安。黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳、岩崎学術出版社。
- Freud,A. & Burlingham,D.(1977)：家族なき乳幼児—その発達と戦時下の保育。久米 稔訳、川島書店。
- Kübler-Ross,E.(1977)：続・死ぬ瞬間—最期に人が求めるものは。川口正吉訳、読売新聞社。
- Segal,H.(1977)：メラニー・クライン入門。岩崎徹也訳、岩崎学術出版社。
- Aguilera ,D.C. & Messick,J.M.(1978)：危機療法の理論と実際—医療・看護福祉のために。小松源助・荒川義子訳、川島書店。
- Schur,M.(1978)：フロイト—生と死(上)。安田一郎・岸田 秀訳、誠信書房。
- Westbarg,G.E.(1978)：グッド・グリーフ—悲しみにある人々へ。戸川 隆訳、聖文社。
- 山本 力(1978)：対象喪失と喪のプロセス—短期心理療法による—青年期事例の分析。広島大学大学院教育学研究科、4、158—164。

[第三期：1979～1984]

- Abraham, K. (1979) : 対象喪失ととりいれ. 細木照敏・飯田 真訳, 現代のエスプリ148: 精神分析・フロイト以後. 小此木啓吾編, 至文堂, 57-67.
- 足立 博 (1979) : 躁うつ病の精神療法—失われた悲しみの場所. 飯田 真編, 躁うつ病の精神病理 3, 弘文堂, 161-183.
- 福島 章 (1979) : 喪と殺人. 飯田 真編, 躁うつ病の精神病理 3, 弘文堂, 185-207.
- 樋口和彦 (1979) : 精神療法における「死」の宗教的問題. 季刊精神療法, 5(1), 17-23.
- Hinton, J. (1979) : 死とのであい. 秋山さと子・定方昭夫訳, 三共出版.
- 河野博臣 (1979) : 死の精神療法. 季刊精神療法, 5(1), 8-16.
- 久野 昭 (1979) : 葬送の倫理. 紀伊國屋書店.
- Masterson, J.F. (1979) : 青年期境界例の治療. 成田善弘・笠原 嘉訳, 金剛出版.
- 小此木啓吾 (1979) : 対象喪失—悲しむということ. 中央公論社.
- Rutter, M. (1979) : 母親剥奪理論の功罪—マターナル・デプリベーションの再検討. 北見芳雄・佐藤紀子・辻祥子訳, 誠信書房.
- Crowcroft, A. (1980) : 精神医学への招待—心の病を理解するために. 藤縄 昭・三好暁光・新宮一成訳, 創元社.
- Gardner, R.A. (1980) : パパとママの離婚. 深沢道子訳, 社会思想社.
- 柏木哲夫 (1980) : 臨死患者ケアの理論と実際—死にゆく患者の看護. 日総研出版.
- Bowlby, J. (1981) : ボウルビー・母子関係入門. 作田 勉訳, 星和書店.
- Bowlby, J. (1981) : 母子関係の理論Ⅲ 対象喪失. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳, 岩崎学術出版社.
- Mahler, M., Pine, F. & Bergman, A. (1981) : 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳, 黎明書房.
- 吉松和哉 (1981) : 対象喪失と精神分裂病—幻想同一化的自我(幻想的自我同一性)の破綻と発病. 藤縄 昭編, 分裂病の精神病理10, 東京大学出版会.
- Gardner, R.A. (1982) : ひとり親と子どもたちへ—母子・父子家庭のあり方. 鑑 幹八郎・青野篤子・児玉厚子訳, 北大路書房.
- Grollman, E.A. (1982) : おじいちゃんは死んだのです—死をうけとめる親と子の対話. 松田敬一訳, 講談社.
- 柏木哲夫 (1982) : 臨死患者に対する精神医学的アプローチ(その1). 精神分析研究, 26, 133-139.
- 近藤 裕 (1982) : 「自分の死」入門. 春秋社.
- Kübler-Ross, E./ 文 Warshaw, Mal / 写真 (1982) : 生命ある限り一生と死のドキュメント. 霜山徳爾・沼野元義訳, 産業図書.
- Kübler-Ross, E. (1982) : 死ぬ瞬間の子供たち. 川口正吉訳, 読売新聞社.
- Masterson, J.F. (1982) : 青年期境界例の精神療法—その治療効果と時間的経過. 作田 勉・恵 智彦・大野裕・前田陽子訳, 星和書店.
- 辻 悟 (1982) : 臨死患者に対する精神医学的アプローチ(その2). 精神分析研究, 26, 141-143.
- 若林一美 (1982) : 安らかな死のために—ホスピス. 現代出版.
- 渡辺久子 (1982) : 母性的養育の剥奪と家族(その1)—現代における意義と動向. 加藤正明・藤縄 昭・小此木啓吾編, 講座・家族精神医学 3, 弘文堂.
- 山本 力 (1982) : E.A.Grollman: 「愛する人の死を越えて生き続けること」(抄訳). 広島心理療法研究, 4(1), 18-26.
- Deeken, A. (1983) : 悲嘆のプロセスを通じての人格成長. 看護展望, 8(10), 881-885.
- 平井孝男・柏木哲夫 (1983) : 喪失と喪失反応. 臨床精神医学, 12(5), 549-557.
- 柏木哲夫 (1983) : ホスピスをめざして—一生を支えるケア. 医学書院.
- Klein, M. (1983) : 愛、罪そして償い. 西園昌久・牛島定信編訳, メラニー・クライン著作集 3. 誠信書房.
- Morris, S. (1983) : 悲しみの構造. 高橋 昇訳, 白帝社.
- 岡堂哲雄 (1983) : 夫婦間の葛藤と離婚. 臨床精神医学, 12(5), 575-580.
- 斎藤友紀雄 (1983) : レイプ・クライシス—米国における危機介入活動について. 臨床精神医学, 12(5), 583-590.
- Shneidman, E.S. (1983) : 死の声—遺書・刑死者の手記—末期癌患者との対話より. 白井徳満・白井幸子訳, 現代出版.
- 高橋穂世 (1983) : 真紅のバラを37本. 新声社.
- 山中康裕 (1983) : うつ病者の夢分析の一例. 心理臨床ケース研究 1, 日本心理臨床学会編, 誠信書房, 37-

- 53.
 - Aries,P. (1984) : 悲嘆－悲しみの拒否反応. Fulton,R. 編著／斎藤 武・若林一美訳, デス・エデュケーション, 現代出版, 189－194.
 - 土居健郎 (1984) : 親しい者との死別－その意味と影響. 曾野綾子・A. デーケン編 生と死を考える. 春秋社, 35－55.
 - Fulton,R. 編 (1984) : デス・エデュケーション－死生観への挑戦. 斎藤 武・若林一美訳, 現代出版.
 - 河合千恵子 (1984) : 配偶者の死別後における老年期女性における人生. 社会老年学, 20, 35－45.
 - Lindemann,E. (1984) : 悲嘆－症候と処置. Fulton,R. 編著／斎藤 武・若林一美訳, デス・エデュケーション, 現代出版, 176－188.
 - Saunders,C. (1984) : 告知. Fulton,R. 編著／斎藤 武・若林一美訳, デス・エデュケーション, 現代出版, 148－154.
 - Shneidman,E.S. (1984) : 大量死－核時代の子供たち. Fulton,R. 編著／斎藤 武・若林一美訳, デス・エデュケーション, 現代出版, 268－276.
 - 乾 吉佑 (1984) : 「Mourning Work」か「適応」か－職場メンタル・カウンセリングにおける二つの治療機序. 精神分析研究, 28(4), 119－122.
 - 岩崎哲也 (1984) : クライン学派および対象関係学派からみた躁とうつ. 精神 分析研究, 28(4), 136－139.
 - Janis,I.L. (1984) : ストレスと欲求不満－こころの健康のために. 秋山俊夫編訳, 北大路書房.
 - Mischerlich,M. (1984) : 喪われた悲哀－ファシズムの精神構造. 林峻一郎・馬場謙一郎訳, 河出書房新社.
 - Rutter,M. (1984) : 続・母親剥奪理論の功罪. 北見芳雄・佐藤紀子・辻 祥子訳, 誠信書房.
 - 曾野綾子 (1984) : 生と死を考える. 春秋社.
 - 渡辺明子 (1984) : 「悲しみ」という言葉・情緒・身体感覚の統合された出現－境界例に於ける抑うつ的ポジションの過程. 精神分析研究, 28(4), 122－125.
 - 渡辺久子 (1984) : 母性的養育の剥奪 (Maternal Deprivation) と精神分析 その1. 精神分析研究, 28(3), 91－106.
 - 渡辺久子 (1984) : 「いない(fort) いた(da)」遊びの反復強迫により対象喪失の否認を続けた一女兒の治療過程. 精神分析研究, 28(4), 115－118.
 - 山本 力 (1984) : 愛する対象を喪失した一女性の喪のプロセス. 村瀬孝雄編, 講座心理臨床の実際8 青年期危機の心理臨床, 福村出版, 66-90.
 - 安岡 誉 (1984) : 往診精神分析で治療中断から立ち直った外出恐怖症例. 精神分析研究, 28(4), 91－94.
- [第四期：1985～1989]
- Ewy,D. & Ewy,R. (1985) : 赤ちゃんを無くした両親への援助 (「悲しみのとき」改題). 梅津祐良・梅津ジーン訳, メディカ出版.
 - Gill,D. (1985) : 「死ぬ瞬間」の誕生－キューブラ・ロスの50年. 貴島操子訳, 読売新聞社.
 - 樋口和彦・平山正実編 (1985) : 生と死の教育－デス・エデュケーションのすすめ. 創元社.
 - Kübler-Ross,E. (1985) : 新・死ぬ瞬間. 秋山 剛・早川東作訳, 読売新聞社.
 - Kushner,H. (1985) : ふたたび勇気をいだいて－悲嘆からの出発. 日野原重明・斎藤 武訳, ダイアモンド社.
 - 小此木啓吾 (1985) : 現代精神分析の基礎理論. 弘文堂.
 - 小此木啓吾 (1985) : 精神分析の臨床的課題. 金剛出版.
 - 米倉五郎 (1985) : あるスキゾイド青年の喪の心理過程－治療終結の確認にロールシャッハ・テストを活用して. 日本心理臨床学会編, 心理臨床ケース3, 誠信書房, 123-141.
 - Albrecht,M. (1986) : 夫との死別. Kjervik,D.K. & Martinson,I.M. 編, 女性とストレス3 看護の視点, 武山満智子・宇川和子訳, 日本看護協会出版会, 203－219.
 - Chabanis,C. (1986) : 死をめぐる対話. 足立和浩・吉田葉菜訳, 時事通信社.
 - 千葉敦子 (1986) : ニューヨークでがん生きる. 朝日新聞社.
 - Finck,K.S. (1986) : 子宮切除の際に起こり得るヘルスケア上の危機. Kjervik,D.K. & Martinson,I.M. 編, 女性とストレス3 看護の視点, 武山満智子・宇川和子訳, 日本看護協会出版会, 139－176.
 - Gorer,G. (1986) : 死と悲しみの社会学. 宇都宮輝夫訳, ヨルダン社.
 - Grollman,E.A. 編 (1986) : 愛する人を亡くした時. 松田敬一訳, 春秋社.
 - 平山正美・デーケン, A. 編 (1986) : 身近な死の経験に学ぶ. 春秋社.
 - 星野 命 (1986) : 「ライフサイクルと危機」新論. 日本家族心理学会編, ライフサイクルと家族の危機 (家族心理学年報4), 金子書房, 53-66.
 - 石川弘義 (1986) : 妻からの贈りもの, 海竜社.

- Kjervik,D.K. & Martinson,I.M.編 (1986) : 女性とストレス 3 看護の視点. 武山満智子・宇川和子訳, 日本看護協会出版会.
- 古牧節子 (1986) : リハビリテーション過程における心理的援助—障害受容を中心として. 総合リハビリテーション, 14(9), 719-723.
- 小島操子 (1986) : 喪失と悲嘆—危機のプロセスと看護の働きかけ. 看護学雑誌, 50(10), 1107-1113.
- Martinson,I.M. (1986) : 子どもの死—2つの事例. Kjervik,D.K. & Martinson,I.M. 編, 女性とストレス 3 看護の視点, 武山満智子・宇川和子訳, 日本看護協会出版会, 220-232.
- 増井玲子・牛島定信 (1986) : 両親に離婚歴のある30代女性神経症例について. 季刊精神療法, 12(1), 42-51.
- 皆川正男・清水由紀夫・日下朗子 (1986) : 老年期うつ病—生活の音を失った1症例. 老年精神医学, 3(3), 364-368.
- 大山正博 (1986) : 死にゆく過程—死への準備教育のために. デーケン, A.・メヂカルフレンド社編集部編, 死を看取る, メヂカルフレンド社, 1-32.
- 斎藤 武 (1986) : アメリカにおける末期患者のカウンセリング. デーケン, A.・メヂカルフレンド社編集部編, 死を看取る, メヂカルフレンド社, 275-295.
- 白井幸子 (1986) : 死にゆく人へのカウンセリング. デーケン, A.・メヂカルフレンド社編集部編, 死を看取る, メヂカルフレンド社, 145-164.
- 玉谷直実 (1986) : 乳房よかえておいで—心理療法家の乳ガン体験記. 春秋社.
- 渡辺智英夫 (1986) : 喪失体験にひきつづく—強迫症状. 季刊精神療法, 12(3), 52-57.
- 渡部英子・石川勝美・金子りつ子他 (1986) : 子供の死を宣告された時、母親は…患者家族に現われた悲嘆反応とその回復過程. 看護学雑誌, 50(10), 1114-1119.
- 柳田邦男 (1986) : 「死の医学」への序章. 新潮社.
- 千葉敦子 (1987) : 「死への準備教育」日記. 朝日新聞社.
- 千葉敦子 (1987) : よく死ぬことは、よく生きることだ. 文芸春秋.
- Frantz,G. (1987) : 花咲く木ぎれ 誕生の悲惨な秘密. リース・タキ・サチコ・安島智子訳, 山王出版.
- 藤田 正 (1987) : 「別れ」事例ノート・死別—バアさん・かあさん・おかあちゃん. ナカニシヤ出版.
- 広瀬徹也 (1987) : 抑うつと悲哀. 土居健郎・笠原 嘉・宮本忠雄・木村 敏編, 神経症と精神病1 (異常心理学講座4), みすず書房, 255-308.
- 加藤藤子・我妻令子 (1987) : メガホンの講義—文化人類学者・我妻洋の闘い. 文芸春秋.
- 河合千恵子 (1987) : 配偶者と死別した老人の生活適応. 老年精神医学, 4(2), 160-168.
- 河合千恵子 (1987) : 老年期における配偶者との死別に関する研究—死の衝撃と死別後の心理的反応. 家族心理学研究, 1(1), 1-16.
- 小谷野淳子・橘玲子・運上司子・中村協子 (1987) : 夫の自殺後の病的悲嘆反応—生活史とロールシャッハ・テストからの検討. 心理臨床学研究, 4(2), 35-45.
- Masterson,J.F. (1987) : 逆転移と精神療法の技法—成人境界例治療の教育セミナー. 成田善弘訳, 星和書店.
- Parkes,C.M. & Weiss,R.S. (1987) : 死別からの回復—遺された人の心理学. 池辺明子訳, 図書出版社.
- 若林一美 (1987) : 死をみつめる心. 主婦と生活社.
- 山野 保 (1987) : 「未練」の心理—男女の別れと日本の心情. 創元社.
- デーケン, A.・重兼芳子編 (1988) : 伴侶に先立たれた時 (生と死を考えるセミナー第3集). 春秋社.
- デーケン, A. (1988) : 悲しみと死への準備教育. 長谷川 浩編, 生と死と家族 (講座家族心理学5), 金子書房, 263-275.
- GLaser,B.G. & Strauss,A.L. (1988) : 「死の Awareness理論」と看護—死の認識と終末期ケア. 木下康仁訳, 医学書院.
- 長谷川 浩 (1988) : 死別と哀悼過程への心理的援助. 長谷川 浩編, 生と死と家族 (講座家族心理学5), 金子書房, 219-238.
- 平木典子 (1988) : 離婚のメカニズムとカウンセリング. 平木典子編, 夫と妻—その親密化と破綻 (講座家族心理学2), 金子書房, 117-134.
- 平山正美・斎藤友紀雄編 (1988) : 悲しみへの援助—グリーフ・ワーク (現代のエスプリ248). 至文堂.
- 河合千恵子 (1988) : 老年期の配偶者との死別に関する研究 (その2)—死別後の適応とそれに影響する諸要因の効果. 家族心理学研究, 2(2), 119-129.
- 岩井 寛・松岡正剛 (1988) : 生と死の境界線. 講談社.
- 季羽俊文子 (1988) : 喪失予期の悲嘆作業について—訪問看護の立場から. デーケン, A.・重兼芳子編, 伴侶に先立たれた時, 春秋社, 148-160.

- Pollock, G.H. (1988) : 悲哀－解放過程と移住－自発と強制. 西園昌久・ヤマモト, J. 編, 日本・アジア・北アメリカの精神療法, 弘文堂, 239-253.
- Raphael, B. (1988) : 災害の襲うとき－カタストロフィの精神医学. 石丸 正訳, みすず書房.
- Seagal, H. (1988) : クライン派の臨床. 松木邦裕訳, ハナ・スィーガル論文集, 岩崎学術出版社.
- 島田照三・黒川新二編 (1988) : 母性喪失. 同朋社.
- 鈴木志津枝 (1988) : 終末期の夫を持つ妻への看護－死亡前・死亡後の妻の心理過程を通して援助を考える. 看護研究, 21(5), 399-410.
- 滝口俊子 (1988) : 母子相互関係と親離れ・子離れのプロセス. 国谷誠朗編, 親と子－その発達と病理 (講座家族心理学 3), 金子書房, 45-67.
- Buckingham, R.W. (1989) : ぼく、ガンだったの?－死にゆく子どものケア. 松下祥子訳, 日野原重明監修, 春秋社.
- Du Boulay, S. (1989) : シシリー・ソンドース－ホスピス運動の創始者. 若林一美・若山隆良・棚瀬多喜雄・岡田 要訳, 日本看護協会出版会.
- Elson, M. 編 (1989) : コフォート自己心理学セミナー (1). 伊藤 洸監訳, 金剛出版.
- Gordon, R. (1989) : 死と創造. 氏原 寛訳, 創元社.
- Jange, M. (1989) : 父親の死について描かれた本－家族員の死とそれに取り組む遺族を援助するための予防としてのアートセラピー. 鈴木 恵訳, 家族画研究会編, 臨床描画研究Ⅳ 描画の臨床的活用, 金剛出版, 113-128.
- 河野博臣 (1989) : 新版・死の臨床. 医学書院.
- 黒田実郎 (1989) : マターナル・デプリベーション－母子関係の病理. 小児看護, 12(4), 484-491.
- 中野由美子 (1989) : 母子分離によってみられる子どもの不安. 小児看護, 12(4), 477-483.
- 高橋蔵人 (1989) : 青年期における分離個体化に関する研究－質問紙調査による考察. 心理臨床学研究, 7(2), 4-14.
- 若林一美 (1989) : デス・スタディー死別の悲しみとともに生きる時. 日本看護協会出版会.
- 和久田尚美・松本英夫・村上直人・大原健四郎 (1989) : 母親との死別を契機に精神病様症状を呈した女兒の一例. 児童青年精神医学とその近接領域, 30(5), 388-396.
- 山本 力 (1989) : 見捨てられ抑うつと『守り』－青年期パーソナリティ障害の心理療法の事例検討から. 岡山県立短期大学研究紀要, 33(1), 12-18.
- 山野 保 (1989) : 「うらみ」の心理－その洞察と解消のために. 創元社.
- [第五期: 1990～ Pr.]
- Buckingham, R.W. (1990) : 死にゆく人と何を話すか. 上竹正躬訳, メヂカルフレンド社.
- Elson, M. 編 (1990) : コフォート自己心理学セミナー(2). 伊藤 洸監訳, 金剛出版.
- Frey, W. (1990) : 涙－人はなぜ泣くのか. 石井清子訳, 日本教文社.
- 長谷川 浩 (1990) : ホスピスケアの展望. 現代のエスプリ, 至文堂.
- 平島奈津子 (1990) : 潜伏期における「エディパルな競争相手」である親の死－その「喪の仕事」をさまたげるもの. 精神分析研究, 34(2), 51-59.
- 井上幸平 (1990) : Duchenne 型筋ジストロフィー症男性の箱庭療法過程. 箱庭療法学研究, 3(1), 14-25.
- 石川弘義 (1990) : 死の社会心理. 金子書房.
- 河合千恵子 (1990) : 配偶者を喪う時－妻たちの晩秋・夫たちの晩秋. 廣済堂.
- Masterson, J.F. (1990) : 自己愛と境界例. 富山幸佑・尾崎新訳, 星和書店.
- 松井江美子 (1990) : 夢を話す女の子 (その1)－亡くなった母に対する喪の仕事とエディプス葛藤. 精神分析研究, 34(2), 60-66.
- 松森基子・林 竜介 (1990) : 悲嘆反応として退行を示した一症例－遺糞と不登校を呈した児童の治療から. 精神分析研究, 34(4), 70-72.
- 森 省二 (1990) : 子どもの対象喪失－その悲しみの世界. 創元社.
- 成田善弘 (1990) : Masterson の境界例概念と治療技法. 季刊精神療法, 16(1), 9-15.
- 岡本万理子・一渡尚道・中山道規 (1990) : 対象喪失体験を持つ境界例患者について－治療者の退行の意義について. 精神分析研究, 34(4), 75-77.
- 小此木啓吾 (1990) : 喪の仕事とエディプス葛藤. 精神分析研究, 34(2), 24-30.
- 小此木啓吾 (1990) : ラプロシュマン－再接近期の危機. imago, 1(10), 30-38.
- 白波瀬丈一郎 (1990) : 「幻滅」の治療的側面－母性剥奪の経験を持つ患者の長期入院治療 (第二報). 精神分析研究, 34(4), 21-23.

- 田代俊孝編著 (1990) : いのちをみつめた3人の証言—デス・カウンセリングの提唱. 同朋社.
- 巽 信夫 (1990) : 女性境界例患者に対する自立にむけての援助—分離・個体化課題達成を軸に. 季刊精神療法, 16(2), 17-24.
- 津田真知子 (1990) : 母喪失から自己修復に向かう遊戯治療過程. 心理臨床学研究, 7(3), 45-55.
- Wallerstein, J. (1990) : 重荷を背負わされすぎた子供—離婚の長期的影響. 江副智子訳, 精神分析研究, 34(2), 31-40.
- 渡辺智英夫 (1990) : 精神療法の「読み」と「ずれ」—喪の過程とエディプス・コンプレックス, 精神分析研究, 34(2), 41-49.
- 山崎章郎 (1990) : 病院で死ぬということ. 主婦の友社.
- デーケン, A. (1991) : 公認されていない悲嘆. ターミナルケア, 1(6), 391-394.
- デーケン, A. (1991) : 悲嘆教育—悲嘆のプロセスとその対応. ターミナルケア, 1(6), 371-374.
- 長谷川 浩・Flitter, H. H. 編 (1991) : ザ・ホスピス—日米比較にみるターミナルケアの人間学. メヂカルフレンド社.
- 橋本元秀 (1991) : 自己愛の障害と対象喪失. 精神分析研究, 34(5), 39-47.
- 平山正実 (1991) : 死生学とはなにか. 日本評論社.
- 石垣靖子 (1991) : 死にゆく患者の看護. 日野原重明・小島操子編, 新・看護学読本 (からだの科学増刊8), 日本評論社, 110-116.
- 神場靖子・皆川邦直 (1991) : 死にゆく人・見送る人の対象喪失および心の成熟について. 精神分析研究, 34(5), 49-57.
- 北田穰之介 (1991) : うつ病の精神分析理論—K. アブラハムからE. ジェイコブソンまで. *imago*, 2(11), 106-115.
- Kübler-Ross, E. (1991) : エイズ死ぬ瞬間. 読売新聞社科学部訳, 読売新聞社.
- 小島操子 (1991) : 末期患者の近親者の悲嘆への援助. ターミナルケア, 1(6), 375-378.
- 国谷誠朗 (1991) : 中・高年期における喪失と悲嘆への援助. ターミナルケア, 1(6), 383-386.
- 室津恵三 (1991) : 「家」を喪失したシゾイド患者との精神療法—治療場面が新たな「家」となることの意味について. 精神分析研究, 34(5), 59-64.
- 中村恵美子 (1991) : 死をみつめて—Oさんの箱庭から学んだこと. 上智大学臨床心理学研究, 15, 140-149.
- 小此木啓吾 (1991) : 対象喪失と悲哀の仕事. 精神分析研究, 34(5), 10-38.
- 大原健士郎 (1991) : 生と死の心模様. 岩波新書.
- 高橋真理・小川捷之 (1991) : 死にゆく患者の心理過程とその対応. 小川捷之編, 心理臨床入門Ⅱ 臨床発達心理学の基礎, 山王出版, 427-451.
- 津田茂子 (1991) : 突然死によって子供を失った家族への援助. 田中正敏・津田彰編, ストレスと突然死, 現代のエスプリ, 至文堂, 157-168.
- ト部文磨 (1991) : キューブラ・ロース—生と死の癒し. 星雲社.
- 山本 力 (1991) : 対象喪失の様態とその位置づけ. 岡山県立短期大学研究紀要, 34, 1-8.
- Bluebond-Langner, M. (1992) : 死にゆく子どもの世界. 死と子供たち研究会訳, 日本看護協会出版会.
- 半田たつ子 (1992) : 喪の作業. ウイ書房.
- 長谷川 浩 (1992) : ターミナルケア・ホスピスケアにおける家族への心理的援助. 日本家族心理学会編, 家族の離別と再生 (家族心理学年報10), 金子書房.
- 秦 恒平 (1992) : 死なれて, 死なせて. 弘文堂.
- 本田哲三・南雲直二 (1992) : 障害の「受容過程」について. 総合リハビリテーション, 20(3), 195-200.
- 星野 命 (1992) : 家族における離別・喪失体験と対処をめぐって. 日本家族心理学会, 家族の離別と再生 (家族心理学年報10), 金子書房.
- 井上美紗子 (1992) : 喪失予期と家族システム. 日本家族心理学会編, 家族の離別と再生 (家族心理学年報10), 金子書房.
- 柏木哲夫編 (1992) : ターミナルケア. 系統看護学講座・別巻10, 医学書院.
- 川畑 隆 (1992) : 「母親の死による家族システムの混乱とその後の秩序化」が, 治療者に教えたこと. 心理臨床学研究, 10(2), 39-51.
- 河野博臣 (1992) : 死を迎えるとき—終末期医療の現場から. 朝日新聞社.
- Kopp, R. L. (1992) : 愛する人が死にゆくとき—ヒューマンケアのアプローチ. 大西和子・窪寺俊之訳, 相川書房.
- 野末武義 (1992) : 家族療法の観点から見た未解決の悲哀の作業. 日本家族心理学会編, 家族の離別と再生 (家族心理学年報10), 金子書房.
- 野田正彰 (1992) : 喪の途上にて—大事故遺族の悲哀の

- 研究. 岩波書店.
- 大橋正洋 (1992) : 障害の受容—心理的なサポート. 石神重信・宮野佐年編, 看護とリハビリテーション (からだの科学・臨時増刊), 日本評論社, 125-129.
- 岡堂哲雄 (1992) : 離婚への道程と離婚式の意味. 岡堂哲雄編, 現代のエスプリ 別冊・マリッジ・カウンセリング, 至文堂, 260-270.
- Santrock, J.W. (1992) : 成人発達とエイジング. 今泉信人・南 博文編訳, 北大路出版.
- 佐藤光房 (1992) : 残された親たち. あすなろ社.
- 真行寺 功 (1992) : 子供の離別・喪失体験と家族. 日本家族心理学会編, 家族の離別と再生 (家族心理学年報10), 金子書房.
- 柳田邦男編 (1992) : 「生と死」の現在. 文藝春秋.
- Bowlby, J. (1993) : 母と子のアタッチメント—心の安全基地. 二木 武監訳, 医歯薬出版株式会社.
- 黒川明登 (1993) : 母とともに治す登校拒否—母子分離不安の治療研究. 岩崎学術出版社.
- 森 省三 (1993) : 「別れ」の深層心理. 講談社現代新書.
- Rees, W.D. (1993) : 配偶者に先立たれた者の幻覚体験. 岡本栄一・大山正監訳, キースタディーズ・心理学(F), 新曜社, 159-175.
- Sands (1993) : 周産期の死—流産・死産・新生児の死亡. 竹内 徹訳, メディカ出版.
- Burnell, G.L. & Burnell, A.L. (1994) : 死別の悲しみの臨床. 長谷川 浩・川野雅資訳, 医学書院.
- 平山正実 (1994) : 死別した家族に対する援助. ターミナルケア, 4 (4), 283-287.
- 衣笠隆幸 (1994) : 対象喪失と投影性同一視. imago, 5 (10), 42-52.
- Macnab, F. (1994) : 喪失の悲しみを越えて—新しい旅立ちのサイコセラピー. 福原真知子・仁科弥生・田中祥子・佐々木由利子訳, 川島書店.
- 森 省二 (1994) : 対象喪失. 伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬編, 老年期の臨床心理学, 駿河台出版社, 185-

- 195.
- 西村純一 (1994) : 生きがい喪失. 伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬編, 老年期の臨床心理学, 駿河台出版社, 175-184.
- 岡安大仁・平山正実・シューマン, W. (1994) : シンポジウム 悲しみへの援助. ターミナルケア, 4 (1), 67-79.
- Singh, B. & Raphael, B. (1994) : 遺族の惨事後の罹患率. imago, 5 (8), 124-138.
- 鈴木陽子 (1994) : 乳癌患者における喪失感と悲哀の仕事. 兵庫教育大学修士論文.
- 田中一美 (1994) : 終末期患者の家族や残された家族の心理過程—家族の立場からの分析. ターミナルケア, 4 (3), 249-256.
- 牛島定信・小池真紀子 (1994) : ターミナルケアにおける家族療法. ターミナルケア, 4 (4), 278-282.
- 山本 力 (1994) : 展望・欧米における「喪失と分離、悲嘆」理論の展開—保健福祉領域における心理学的貢献の可能性. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 1, 1-10.
- 中井久夫編 (1995) : 1995年1月・神戸—「阪神大震災」下の精神科医たち. みすず書房.
- 日本死の臨床研究会編 (1995) : 死の臨床 (全6巻). 人間と歴史社.

[付記：お願い]

心理臨床の立場から「喪失と悲哀」に関連する邦文の文献一覧を作成しましたが、漏れている文献が多々あると思います。完全なリストを作成したいと思いますので、お気付きの文献資料がありましたら、お送りいただければ幸いです。

(文献資料の送り先)

〒719-11 岡山県総社市窪木111
岡山県立大学 保健福祉学部
山本 力 宛

The Brief Review and Literature of Loss and Mourning in Japan.

TSUTOMU YAMAMOTO

*Department of Wealfare System and Health Science, Faculty of Health and Welfare Science,
Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-11, Japan*

Key words: Object Loss, Mourning, Thanatology, Terminal Care, Clinical Psychology